

ピアホームだより

2020. 8.10

精神障害者の各種データを読む

—東京都障害福祉計画から

精神障がい者の実態は、人権問題もあってなかなか捉えがたいものがあります。しかし、政策を訴えるにあたっては、やはり、実態というのが欲しいところです。ネットが発達した現在、各種データを居ながらにして取得できる時代となりました。統合失調症に焦点を当てて読み解いてみようと思います。

統合失調症の患者は全国で約 80 万人(都では 8 万)ぐらいとされています。人口の1%と言われ、病院に繋がっている人数がデータとして挙がります。そのうち 15 万人ぐらいが入院となっています、これは入院から地域への政策の下 15 年間で約 5 万人減りました、入院日数は 30 年間で 500 日から 250 日に減っていますのでこのことを反映しているのかもしれませんが。

日中活動はどうなっているのか？都のデータからはデイケア 1~2 万?、通所1万、障害雇用

2000 人(知的・精神障)という数字を推計できました。どこにも繋がっていない人が半分？

現在では、障害者総合支援法も出来、通所が多くなっていると思われま。また、精神障害者の法定雇用の義務付けも始まり、雇用関係も変わってきていると思われま。

話題の韓国映画「愛の不時着」を観賞

—朝日新聞 digital から—

「おばちゃん」たちの魅力...

日本で生まれ育った大半の人にとって、北朝鮮といっても漠然としたイメージしかないと思います。それがドラマの中では、北朝鮮に「自分の知っているおばちゃんと似ているおばちゃん」が住んでいました。おばちゃんたちは誰もが個性的で、キムチをつけたり、選択したり磯長ら井戸端会議しています。そのシーンに、郷愁を覚えた世代もあると思います。

北朝鮮の寒村出身の素朴な青年や、韓流ドラマ好きで女優のチェ・ジウが大好きという青年も北朝鮮の兵士になっていて、人情味あふれる役柄として描かれています。彼らとソン・イェジン演じる韓国の財閥令嬢ユン・セリと一緒に貝焼きを食べ、

貝殻に焼酎を注いで飲むシーンが実においしそうでした。確実に現実として存在しているはずなのに、自分にはまったく見えていなかった世界が、ドラマを通して徐々に照らし出される感じがありました。

私の感想—

文政権の朝鮮半島統一の大きな夢を反映した映画だと思います。だから、北の生活を蔑視することなく、敬意を持って描いています。そればかりでなく、失われた純朴さ・朝鮮独自の文化の再評価にも目を向けているのです。

我が日本でも、アメリカの巨大資本の発する文化に巻き込まれ、それを取り入れることが先端との風潮がありますね。取り上げられる日本の文化もあくまでオリエンタル風味に調理してしまっているように思います。

どんな相手でも敬意を持って接することで相手がみえてくる—障害者と対する我々にも通じる心の豊かさがある映画だと思います。

だから、誰もが“気持ちよく”観られるのではないでしょうか。

8月の予定

8月11日:新規入居者契約、白石顧問医来所